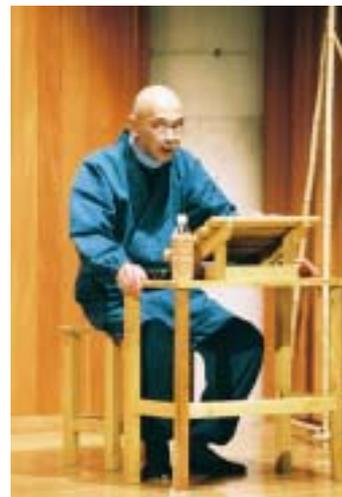


常世の国の百の恋物語をめざして... (脚本:演出家 白井啓治)

石岡に越してきて10年になります。前半の5年はただ寝に帰る場所。後半の5年は、ここを終の地にする覚悟を決めるに費やした時間。10年の迎えた年ようやくこの石岡に終の暮らしを紡ぐ覚悟と目標を見つけることが出来た。それが『常世の国の恋物語百』の創作と発表であった。

この切っ掛けを与えてくれたのが、俳優を志望してやって来た聾者の小林幸枝であった。

旧八郷町の風景をまほろばの里と表現する人もいます。その通りだと思えます。愛すべき風景の中に建つギター文化館を発信拠点として、小林幸枝と常世の国の風景の中、百の恋物語に旅しようと思えます。旅の始まりは「恋瀬の川の恋物語」から。百の恋物語の終着点は見えておりません。百の恋物語を語り舞うのに何年かかるかも見えておりませんが、途中道に迷って行き暮れて、死暮れぬことを念じております。心温かい応援を頂ければと思っております。



脚本家(白井啓治)自ら朗読を担当

ふるさとに生まれた新しい表現の完成をめざして... (朗読舞俳優 小林幸枝)

「朗読舞」「朗読舞劇」と出合って五年が過ぎました。手話言語でこんな舞台表現が出来るとは考えてもいませんでしたので、最初に受けた衝撃は大変なものでした。しかし、始めてみると衝撃はもっと大きなものとなりました。「手話通訳をするな!」「手話劇にするな!」「もっと手話を大事にしろ!」「手話を舞いにしろ!」「説明をするな演技をしろ!舞を舞え!」演出家の言う意味が解りませんでした。今も、難しいことを言わないでと、悲鳴を上げています。

でも、手話を基軸とした新しい舞台表現、朗読舞・朗読舞劇の完成を目指して頑張っていきたいと思っております

